

「私とジェンダー」をテーマに毎回様々な切り口でコラムを掲載しています。

男の子の育て方

なかむら・あきら

1947年大阪府生まれ。
とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ館長。NPO法人SEAN理事。メンズセンター運営委員。花園大学・神戸市看護大学ほか非常勤講師。
著書『男性の「生き方」再考—メンズリブからの提唱』[世界思想社]『デートDVってなに？Q&A』共著[解放出版社]など。

中村 彰

刷り込まれる男の子の望ましい姿

仲間五人で、一九九〇年代初頭に、メンズリブ市民活動を立ちあげた。今風に言えば、男女共同参画社会基本法の主旨を男性の側から推進する取り組みである。私たちが目指したのは「男たちの井戸端会議」であり「相互カウンスリングの場」だ。男どうしで延々話し合うのである。仕事の明け暮れから抜け出て家庭や地域で自分の場を確保し、趣味の活動やボランティアにもかかわる。多様な自分を楽しめる場を目指そうとしたのである。

活動を始めたばかりのころ、幼いころの思い出話になった。成育歴はさまざまなのに、記憶に残る一番古い(?)エピソードが共通していた。幼いころ、転んで泣いていたら、近所の人に、「ボク男の子でしょ！」と声かけられた。「男の子は泣いてはいけません」「男の子なのにうれしそうにはしゃぐな」「ボクは男の子なのだから、強くなければ」「ボクは男の子なのだから、がまんしなれば」という学習の始まりだった。男が生きるとは何か。ツッパリ人生を生きること世間が求めていることを、いろんな機会に学習しながら育つ。

仲間ひとり、小学一年生のころの思い出を語っている。男の子たちが、すぐ蹴ったり、たたいたりするのがいやだった。「男の子だから多少乱暴でもいい」。そんな風潮がきらいだった。私たちが歩んできた歴史や文化、そのなかで育まれた芸術のなかで、私たちは繰り返し男性の生き方として「強く、リーダーシップをはかる」ことを望ましい姿として刷り込まれてきた。いまま、文学や新聞、テレビなどが伝え続けている。劇画も漫画もそのパターンで描かれている。

思うに、日本という社会は暴力容認社会だ。子どもの世界のイジメ。企業社会にも「職場のなかのイジメ」が存在する。権力による弱者の支配である。同質性を重んじる風潮が、それを後押ししている。そうした日本社会のなかで、悪いことという認識を薄れさせている。犯罪として成立しない所以である。

感情表現が苦手な男の子

怒りも暴力で、と感情を暴力で表現するよう訓練を受けているようなものだから「男には暴力が許されている」と見られやすい状況がある。大人たちも、たとえば、職場で感情をあらわにするマイナス評価に結びつく。ますます表面上は自分の感情を殺すように毎日自己訓練している。

人間は一回自分の感情をのみこんでしまおうと、だんだん自分自身でも自分が何を考えているか、自分の本当の感情というものが分からなくなる。反論したいのに言いこめられるのが怖くてニコニコして賛成してしまったり、ひどく腹を立てているのに、ニコニコしている。そして、突然、堪忍袋の緒が切れる。するとパチンと手が出る。

ある男性は、幼い息子に「そんなことしてはダメだよ」と諭した。なかなか改めようとしないう息子にいらだち、手をあげてしまった。やさしく諭されていた幼児は、笑っていた父親から突然たたかれたのでパニックだ。こんな体験から、彼は「怒り」を自己規制したが、そのころ、出会ったのがダニエル・J・ソニンキンほか『脱暴力のプログラム』(青木書店)だった。「怒りと暴力は別のもの。問題は怒りの表現の仕方だ」というメッセージが記されていた。

中学生の男性から相談を受けたこと